

日本で台風の季節といえば8月・（ ）だが、台湾では6月には台風の（ ）になっている。これは台湾で働く（ ）、大きな問題である。運が悪いと、（ ）台風に遭い、夏休みに日本で（ ）台風の被害を受けることになるからである。

（ ）、「台風」は、なぜ台風と呼ばれるのだろうか。（ ）日本では、夏から秋にかけての強い（ ）「野分」と呼んでいた。野分というのは、野原の（ ）掻き分けるように吹く風という意味である。和歌や（ ）使われた優雅な語だが、今では（ ）使われない。

「台風」の語源としてよく（ ）するのは、台湾から来る風だから（ ）という話である。しかし、「台風」は、戦後に（ ）使われた表記で、もともとは「颱風」と（ ）という。そうならば、「『台』湾から来る『風』」では（ ）なる。もっとも、台湾の立場からすれば、（ ）台湾にも来るのだから、「台湾から来る風だ」（ ）日本側の言いがかりだといえなくもない。

実は、（ ）「颱風」という語は、日本では、1907年に岡田武松博士が論文の（ ）使ったのが初めてだと

いわれている。しかし、正確な（ ）知られておらず、中国福建省地方で使われていた「颶」( )語(台湾の辺りの風という意味)を借りたものだという( )ある。それが正しいければ、台湾から来る風だから( )という話もあながち間違いではないことになる。

( )、「颶風」は、英語の「typhoon」に漢字を( )だといわれることもある。さらには、「嵐」を( )アラビア語の「tuffon」やウルドゥー語で「暴風雨」を( )「tufan」に由来するという説もある。ただ、明治時代には「タイフーン」というカタカナ語も使われていたようであり、( )「typhoon」を「颶風」と書いたとする説は少し( )あるようにも思われる。

また、「颶風」( )語は、中国語(広東語)の「大風(tai fung)」をもとにしているという考えも( )。中国語の「大風」がアラビア語の「tuffon」になり、( )英語の「typhoon」になって、中国語に逆輸入された( )「颶風」となったという説である。日本語の( )、それをさらに輸入したことになる。

( )、「typhoon」の語源は、ギリシャ神話にあらわ

れる（ ）「typhon（テュフォン）」だという説もある。

テュフォンは、100の蛇の（ ）を持った巨大な龍で、

（ ）からは炎を吐き、口からは溶岩を吐き出し、巨大

な（ ）太陽を覆い隠し、竜巻や嵐を（ ）

いわれている。もともと「typhon」は、疾風という（ ）

ギリシア語で、テュフォンは後には「風の神」と（ ）に

なる。もし「typhon」が「台風」の語源ならば、（ ）

怪物が現代の日本や台湾で暴れ回っている（ ）ことで、

少しおもしろい気もする。